

協創で再構成される野外観察

— 個人の表現活動と他者との学び合いが連動した外的世界の認知 —
Field Observation Reconstructed Through Co-Creation.

Advanced Perception Of An External World Linked To Individual Expressive Activities And Learning Together.

福田 大年¹⁾ 荒俣 蓮²⁾

FUKUDA Hiroto¹⁾ ARAMATA Ren²⁾

1) 札幌市立大学 2) 札幌市立大学デザイン研究科

Abstract: This paper confirms the process by which participants in the hands-on field observation learning program "Machimoji Hunting" reconstruct field observations through Co-Creation, based on the results of activities in a class where "Machimoji Hunting" was introduced. However, the specific phenomena that occur in the process of reconstruction of observation could not

Key Word: Field Observation, Perception, Co-Creation

1. はじめに

1.1. 研究目的

本稿の目的は、個人の表現活動と他者との学び合いを連動させた体験型野外観察学習プログラム「まちもじハント」の参加者の野外観察が再構成される過程を探ることである。

1.2. 研究背景

アイデアは「既存の要素の新しい組み合わせ」であり、その生成には資料収集、咀嚼、孵化、発見、具体化の5つの段階がある [1]。さらに既存の要素とは「人生とこの世の種々様々な出来事についての一般的知識」であり、複数の既存の要素の収集と関連性を探る修練は、日常的にできるとも述べている。既存の要素の収集と関連性を探るには、野外から多くの情報を得ること [2]、観察をSEEからLOOKに変えること [3]、小さな違和感に気づく感覚を持つこと [4]、見立てと類推によって過去の経験と比較すること [5]、観察結果を表現すること [6] など、自分の外側の環境（外的世界）、特に野外を観察する際の思考と態度の醸成が重要である。つまり、野外観察で集めた無数の要素を多様に組み合わせて連想を連続的に発生させることは、アイデア生成の初期段階には必要であり、この習慣によって外的世界の認知は変化し続ける。しかし、個人の野外観察の修練に着目した事例は多いが、修練する個人が集まり学び合うことで思考と態度に起こる変化とその効果は、あまり語られてない。

1.3. 野外観察と協創を連動させた学習の重要性

アイデア生成能力を個人に内在する特殊な才能と捉え、障壁を感じるデザイン初学者は多い。筆者は、協創を「参加する人たちが、表現を通して互いの視点の違いを理解し合い、協働的に学び合う場 [7]」として実践している。野外観察と協創を連動させることで、その障壁が減る可能性がある [8]。

以上のことから、アイデア生成の初期段階で重要とされる野外観察を日常的に練習するプログラムとして、個人の表現活動と他者との学び合いによって外的世界の認知に変化を促す「まちもじハント」を考案するに至った。

2. まちもじハントの概要

まちもじハントは、札幌市立大学デザイン学部1年次授業「アイデア生成プロセス」の授業課題として2018年から毎年11月頃に実施している。まちもじとは、看板や製品など人工物に印刷された文字から、文字に見える自然物や人工物

be clarified. The author believes that by clarifying the specific phenomena that occur in the process of reconstruction, we can find clues to understanding our thoughts and attitudes that change depending on our interactions with people and things other than ourselves in an external world.

まで、身の回りにある文字もしくは文字に見立てられる物全般を指す (図1)。使用する道具は、カメラ、PC、採集シート (図2) である。活動は、野外で文字を見つけ、採集シートを作成し発表会をするまでを1回として、これを2、3回繰り返す。参加者はまず身の回りの風景から、自分の名前の平仮名を一文字ずつ探し出し、カメラで撮影する。次に、撮影した一文字ごとに採集シートをPCで作成する。採集シートには、文字を見つけた風景の写真と、見つけた文字の写真を貼り付け、採集者、日時、場所、採集の状況・理由など野外観察記録の四条件 [2] を書く。最後に採集シートを持ち寄り、文字を採集した経緯と見立て方を見せ合い、語り合うことで観察の思考と態度を気づき合う発表会をする (図3)。

2018年と2019年は、各3回実施した。1回目は、練習として街中にある印刷文字から採集した。2回目は、文字に見える自然物や人工物から文字を見立て採集した。3回目は2回目を超える見立て文字を探した。2020年と2021年は、COVID-19感染拡大の影響で、各2回の実施とし、その2回とも発表会は対面とオンラインのハイブリッド形式で行なった。学生は、2018年86人、2019年88人、2020年91人、2021年94人、延べ359人が参加した。まちもじは、2018年1,539枚、2019年1,585枚、2020年1,071枚、2021年1,053枚、延べ5,248枚が採集された。

3. 野外観察が再構成される過程

採集シートを比較した結果、まちもじハントの経験によって発生する野外観察の再構成には、2つの大きな特徴があることが分かった。視点の意図的な切り替え、風景の切り取り方の工夫の変化が見られること、他者と成果を見せ合って語り合うことによって採集方法に変化が見られることである。

1つ目の特徴の例として、2000年に参加した学生Utが採集した3つの「た」の変化を見る (図4)。1回目は、「レトロな字体に魅力を感じ」てコンビニエンスストアの看板に印刷された「たばこ」から「た」を採集した。2回目は、自宅で「洗濯物を干してる時」に、「これ開き方次第で『た』にできんじゃね?」と考え、洗濯ハンガーの形から「た」を見出し採集した。3回目は、『「た」に見える』には「線が縦1本と横3 (本: 筆者注) あること」が条件と理解して野外観察し、「標識の裏を見たとき、その条件を満たしていたので、後は切り取りで工夫」する考えに至り、道路標識の裏側の骨



図2：採集シート



図3：発表会の様子（2018年）



図4：学生Utが採集した「た」の変化



図5：学生Ymが採集した「よ」の変化

組みから「た」を採集した。野外観察を日常的に繰り返すことは、対象の本質を理解する能力向上に貢献した。

第2の特徴の例として、2000年に参加した学生Ymが採集した「よ」の変化を見る（図5）。1回目は、店舗前の旗に印字された「よ」を「筆で書いたような曲線が綺麗」という理由で採集した。2回目は、「ペダルをついた丸い部分が目に付き」、自転車のフレームの一部を切り取り「よ」を見出した。しかし発表会で、「同色フレームの方が文字に見え易い」と指摘されたことで、3回目は「色が他（のフレーム：筆者注）と合う自転車」を探して「よ」を採集した。他者との学び合いが、外的世界を観る視点の変化に貢献した。

4. 考察

採集シートの分析から、まちもじハントは野外観察の学習プログラムとして以下の特徴を有していることが分かった。

観察への工夫が観察に能動性を与える：野外観察を繰り返すことで、風景の中にある文字をそのまま採集する受動的な観察から、身の回りの風景から文字を浮かび上がらせる能動的な観察に変化する。頻繁に外出する、観る姿勢を変える、友人と一緒に観察する、手で触る、過去の写真ストックを眺めるなど、外的世界の認知を変化させるための学生自身による物理的、身体的、情動的な工夫があった。

観察の思考と態度の変化に伴い情報量が増大する：観察の思考と態度に変化させるための工夫を重ねることで、日常生活にも変化が起こる。常に観察的な思考と態度で過ごすようになり、野外観察の範囲と深度が変化し採集量が増える。身の回りのモノゴトと日々のふとした出来事から気づくこと、ずっと眺めるからこそ見えてくるが増大し、外的世界を認知する自分の変化を実感しやすくなる。

他者と気づきを学び合うことで視点が揺さぶられる：採集シートを持ち寄り、見せ合い、視点を比べ、語り合うことによって、他者が観察で得た多くの気づきに出会い、自己の視点が揺さぶられる。他者との学び合いを促進させるために、



図1：まちもじの参考例（映画「MEMORIES[7]」の題字）

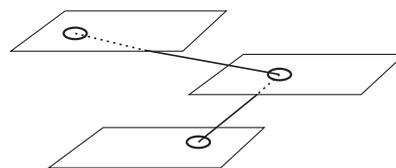


図6：他者の気づきと連鎖する

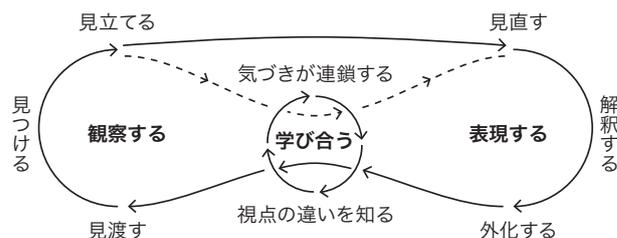


図7：個人の表現活動と協創で高度化する外的世界認知プロセス

採集シートの表現も自然と高度化されていく。この気づきの表出と学び合いを繰り返し味わうことで、他者の視点との類似性と差異を理解していく（図6）。

観察が外的世界への特別感を抱かせる：まちもじを採集すると、見慣れた風景でもこれまでと異なる見え方になるだけでなく、愛着にも似た特別感が醸成される。

以上から、まちもじハントは、野外観察の工夫と採集結果の表出を繰り返す個人の修練過程と、他者との学び合いを連動させた学習プログラムと言える。つまり、個人の表現活動と協創を何度も往還する活動は、野外観察の思考と態度を再構成し続ける過程であり、その再構成された野外観察は、外的世界の認知に高度化をもたらす（図7）。

5. まとめと展望

本稿では、体験型野外観察学習プログラム「まちもじハント」の参加者の野外観察が協創によって再構成される過程を、まちもじハントを導入した授業の活動成果を基に確認した。しかし、観察が再構成される過程で発生する現象を具体的に解明できていない。再構成される過程で発生する現象を具体的に解明することで、外的世界にある自分以外のヒト、ヒト以外のモノゴト、これらとの相互作用で変化せられる自分自身の思考と態度を知る手がかりが見つかると考えている。

引用・参考文献：[1]Young, J.W., 今井茂雄訳 (1988). アイデアのつくり方, ティビーエス・ブリタニカ. [2]川喜田二郎 (1967). 発想法, 中央公論社. [3]加藤昌治 (2003). 考具, 阪急コミュニケーションズ. [4]菅俊一 (2017). 観察の練習, NUMABOOKS. [5]瀬戸賢一 (1995). メタファー思考, 講談社. [6]藤原大 (2013). カラーハンティング展, 21_21 DESIGN SIGHT. [7]福田大年ほか (2020). 協創スケッチ法による協働的な創造活動生成過程の解明, デザイン学研究, 67(1), 11-18. [8]阿部慶賀 (2019). 創造性はどこからくるか, 共立出版. [9]大友克洋ほか (1995). MEMORIES, 松竹.